

さまざまな経験やそのときどきの想いを糧に築きあげ、「昨日より今日、今日より明日」の人生を充実させている、
はまだたいほう 浜田大豊さんの生き方を紹介します。

食と風土を支える百年市場が これからの地域のためにできること



【Profile】弘前市出身。東京と仙台で酒類の総合商社で働いたのち、2021年にUターン。「弘前食品市場協同組合（虹のマーケット）」から組織変更した「株式会社生き活き市場」の専務取締役として、虹のマーケットの管理運営やイベント主催、若者の起業支援などを行う。虹のマーケットホームページ <https://www.nijinomart.com/>

実は全国的に見ても面白い お客様との対話を大切に「虹のマーケット」

弘前駅から徒歩5分。1954年に創業した「虹のマーケット」は、半世紀以上にわたり弘前市民の台所として親しまれています。虹のマーケットは一般的なスーパーマーケットとは違い、いくつもの専門小売店が一つ屋根の下で軒を連ねる「食品市場」。浜田さんは、虹のマーケット内ですじこ屋を営むご両親のもとで生まれ育ちました。「小学校高学年の頃から、お盆や年末年始には姉弟みんなで店を手伝うのが恒例でした」と振り返ります。

浜田さんは弘前市内の高校を卒業後、上京し大学に進学。その後酒類の専門商社に入社して東京と仙台で6年間営業として働きます。「社会人になってからも毎年お盆と正月は弘前に帰っていて、虹のマーケットにも立ち寄っていました。ある程度社会人として経験を積んで、改めて虹のマーケットを見たとき、こういう商売が成り立って生き残っていること自体珍しく、全国的にみても面白い場所なのではないかと思ったんです」と浜田さん。ちょうどそのタイミングで、もともと組合組織だった虹のマーケットを株式会社

に組織変更し、現場を管理する人材が必要だと知り、自分がその役割を担おうとUターンを決意します。

組織変更を経て、より良いサービスが 提供できる組織に生まれ変わった

「Uターンして最初に、お店の人たちとコミュニケーションを取ることから始めました。一対一で向き合って話してそれぞれの考えや思いを汲み取り、妥協点を探す。お店の代表者なので、相手は全員社長なんです。そういう意味では前職で酒屋さんを回っていた経験が活かされました」。協同組合だと何をすることも多数決で、なかなか物事を推進していきづらい状況だったのが、組織変更したことで一つの建物内での意思統一がしやすくなったそう。とはいえ資金面や建物の管理、誘客など、課題はたくさんあったといいます。特にテナント数の減少は深刻で、創業当初34店舗あった店舗数は徐々に減り、組織変更を機に一時は18店舗まで減少したそうです。「経営者の高齢化もあるので、区切りをつけたいと言われたら止めることはできないですよ。一方でこれから販売を始めたスタートアップの方にはどんどん挑戦してほしいと思うので、虹のマーケット内でチャレンジ起業のテナントを提供する取り組みを始めました。また店舗での人材育成や雇用相談、労働環境の改善などに取り組んでもらうべく、社労士につないでサポートをしています」。

取り組みの成果もあり、現在虹のマーケットの店舗数は25店舗まで増加しました。若い販売員も多く活気があります。イベントの開催やSNSでの告知、店内清掃の徹底など積極的取り組み、若年層のお客様も増えてきました。

これからも、地元の方のための 「虹のマーケット」を大切にしたい。

ひたむきに目の前の課題に取り組み続け3年。

ようやく虹のマーケットの将来像を描けるようになってきたと話す浜田さん。「虹のマーケットは、あくまで地元の方々が日々のお買い物物のために訪れる場所。もちろん売上を伸ばしたい気持ちもありますが、観光地化してしまうのは違うと思っています。地域において、人やお店は自然環境と一緒に資源だと思えます。森や水と同じで、使った分だけ消費されてしまう。だからお客様も販売員の方も疲弊しないように、虹のマーケットにしかない対面販売の良さを大切にしながら尖り続けていきたい」と語ります。

また、今後人口が減少していく未来に対し生き残っていく方法も考えなければなりません。「青森県は2050年台には、2024年6月1日時点の青森県の推計人口に対して、弘前市約25個分（約41万人）の人口が減るといわれています。あと25年でそれだけの人口が減少するなか、お客様を増やすのはそもそも無理だと思っています。このエリアの価値を高めていくことが10年後の虹のマーケットの売上を生み出すことにつながると考えています」。そんな想いから浜田さんは、虹のマーケットにとどまらず、弘前駅前エリア全体を商圈エリアと捉え、虹のマーケットの外側でも若者の起業・創業のお手伝いができるよう、地域の商店街と協力し始めています。

「お店が一つあるだけで、人の流れは変わります。自分たちが暮らす街が生き残るには柔軟に変化していかないと。一方で、途絶えつつある津軽の伝統食のレシピを虹のマーケットで継承できないかを考えています。地域の食文化は風土が反映された価値あるものなので、虹のマーケットの価値として保存し、地元の文化を提供できる場所でありたいです」。地元を愛されてきた「虹のマーケット」が、100年続く場所であるために未来を見据える浜田さんの行動力は、これからの地域の支えになることでしょう。